

渡部悟教授定年退職記念特集

「スポーツにおける運動制御と心理・社会的効果」

1. 企画の趣旨

渡部悟教授は平成31年3月に定年退職を迎えられます。本企画は、渡部教授の定年退職を記念するとともに、これまでのご功績に敬意を表し、渡部教授が専門として研究してこられた「スポーツにおける運動制御」と「スポーツにおける心理・社会的効果」に関わる諸問題の解明を目指して刊行されました。

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会への期待が高まるなか、大会成功やスポーツ振興等に向けて、各方面から多様な取り組みがなされています。スポーツにみられる身体動作の制御機構の解明や、スポーツの実施が心理的側面、社会的側面に及ぼす影響に関するエビデンスの蓄積も、そのような取り組みの1つです。オリンピック・パラリンピックを開催する目的が、単に大会の実施にあるのではなく、その後のレガシーの形成にもあり、そのレガシーの形成を促進することに、それらのエビデンスが役立つからだと考えられるからです。

そこで本企画では、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を目前に控えるこのタイミングで定年退職を迎えられる渡部教授のご専門を主軸とし、10編の論文をご投稿いただきました。それらの論文を通して浮き彫りにされた知見は、現代におけるスポーツを取り巻く諸問題の解明に資するばかりでなく、オリンピック・レガシーの礎になり得るものとなっています。

2. 掲載論文の概要

この企画は、渡部教授のご専門である「スポーツ心理学」と呼ばれる研究分野に根差し展開されています。このスポーツ心理学は、スポーツや運動を心理学的に検討するスポーツ科学の1領域です。その研究対象となる問題は多岐にわたりますが、本企画では「技術」「学習」「健康」「教育」等をキーワードとして挙げる事ができるでしょう。それらのキーワードとご投稿いただいた論文を概観すると、掲載論文は2つに大別されます。1つは、スポーツにみられる身体的活動に関する論文です。もう1つは、スポーツや運動と精神的活動の関係に関する論文です。前者をスポーツにおける運動制御、後者をスポーツにおける心理・社会的効果とし、以下それぞれについて概要を示していきます。

① スポーツにおける運動制御

4編の論文が、スポーツにおける運動制御についての知見を提供してくれています。

運動をコントロールするには、まず外界の状況を把握する必要があります。そしてその得られた情報に基づいて適切に動作を計画・実行します。それを繰り返してトレーニングすることによって、巧みなコントロールがいつでも実現できるようになります。

それらの「見る」を達成する中枢神経系の働き、実際のスポーツ場面で人がみせる「見

る」と「運動」の関わり、そしてその巧みな「運動」を会得するための革新的トレーニング法の提案について報告されています。スポーツにみられる技術の解明に寄与する知見となっています。

② スポーツにおける心理・社会的効果

6編の論文が、スポーツにおける心理・社会的効果についての知見を提供してくれています。

スポーツや運動が肯定的な心理・社会的効果をもたらすことは広く知られています。他方、日本国民における運動習慣の形成と継続に改善の余地があることも指摘されています。また、スポーツにおける競技力という観点から考えると、心理的状況がそれに肯定的にも否定的にも働くことがあります。そのため、スポーツ選手は高い競技力を達成するためにメンタルトレーニングを用いることがあります。

この背景に関わる、スポーツや運動を継続するための心理的要因、大学生や大学スポーツ選手におけるそれらの活動と社会的スキルの関係、スポーツ選手にとってより良い心理的状況を構築するトレーニング法の提案について報告されています。スポーツと心理・社会的要因の関係について、さらなるエビデンスの蓄積がなされています。

3. 渡部悟教授の人と学問

渡部教授は、北海道にお生まれになり、日本大学文理学部体育学科へと進学し、勉学に励むとともに保健体育審議会ハンドボール部の一員としてご活躍されました。

大学卒業後、企業（株式会社フェニックス）にご就職されます。その後、昭和48年に日本大学商学部助手に就任され、昭和58年に助教授に、平成5年に教授になられました。46年間にわたり本学の教育・研究に力を注いでいらっしゃいました。

ご略歴にもあります通り、奉職後には経済学部の近藤正勝先生（スポーツ生理学・元日本大学学生部長）の立ち上げた研究会を中心に、日本大学のスポーツ科学をけん引した吉本俊明先生（スポーツ心理学）や永嶋正俊先生（スポーツ方法学）などの指導を受けながら、主としてスポーツ心理学について研究活動を進めてこられました。

そのように展開されてきた研究の1つに、ハンドボール選手の注視行動に関するものがあります。これは、当時（1980年頃）実験機器の制約のある中で、実際のスポーツ場面において選手がどこへ視線を向けているのかを明らかにした貴重な研究といえます。運動中の注視点に関する研究は、現在ではスポーツ心理学における主要な関心の1つとなっていることから、渡部教授が先見の明をお持ちでいらっしゃったことがうかがえます。スポーツ選手が特定の位置や場所に「視線を向ける技術」を用いているものとして理論化もされており、その確立の基礎となる研究を実践されました。

主要論文一覧をご覧くださいてもわかるように、スポーツ初心者の方の技術向上を目指した研究から、熟練したスポーツ選手がもつ技術の解明を目指した研究まで、常に教育や競技の現場を念頭に研究が展開されてきました。このことは、渡部教授がコーチングと研究が乖離すべきではないという視座のもと、実用的な知見を得るための研究を展開していたことを表しています。

また、業績のテーマを概観すると、渡部教授が担当されていた本学での授業（スポーツ種目）に関わるものが多く、得られた知見を社会に還元するばかりでなく、ご自身の教育活動に生かすことまでを想定されていたように思われます。近年では、運動の得意・不得意にかかわらず、すべての学生がスポーツを楽しめる技術の獲得をねらいとし、初心者の動きの特徴を可視化する研究に取り組まれていらっしゃいます。バドミントンにおけるサービスについての研究もその1つです。これまで指導者が経験的にとらえていた初心者の動きを、できる限り指導現場に役立つ形で数量化されました。

他方、大学生のスポーツや運動と心理的要因の関連についても、多くの知見を残されています。近年、社会問題としても取り上げられている運動習慣の形成や大学生の健康向上を目指して実施されました。運動習慣の継続を維持している者とそうでない者の心理的要因の違いを明らかにしたことは、運動習慣形成に向けたプログラム策定に寄与すると考えられます。

渡部教授が取り組まれたこれらの研究は、本企画における論文でも多数引用されています。積み上げられた研究は、これからも関連領域の研究の発展に大きな力となることでしょう。

渡部教授は、現在でも諸問題の解決に向け共同研究を行っておられます。渡部教授の研究面での活躍と、ますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

日本大学商学部准教授 遠藤 幸一